

特別支援教育部 研究のまとめ

1. 研究の成果

「すすんで学び 豊かな表現で伝え合う児童の育成」という研究テーマにせまるために、特別支援教育部では、以下の6つの方法を考えて実践を行ってきた。

- (1) カードや絵、写真などの視覚的手がかりを活用し、構造化をはかる。
- (2) 模倣することをいろいろな場面で取り入れる。
- (3) 読む活動を多く取り入れる。
- (4) 読むなかで単語や熟語の意味を丁寧に指導する。
- (5) コンピュータを活用する。
- (6) 個別指導の工夫

研究の成果をそれぞれの方法についてまとめてみた。

(1) カードや絵、写真などの視覚的手がかりを活用し、構造化をはかる

- ・自閉症の子にとっては、言葉を使ったコミュニケーションが一番難しい。話し言葉で理解できないから、見てわかる手がかりを与えて理解を促すようにした。授業内容、作業内容、教材、時間割等、一人一人に応じて、目で見えて理解できるように整理して、構造化をはかった。このことで、視覚的手がかりをもとに、教師と児童、児童と児童のコミュニケーションの手助けとなることができた。

(2) 模倣することをいろいろな場面で取り入れる

- ・先生の口を見ながら、同じように発音することをいろいろな場面で行ってきた。とくにあいさつには、繰り返し取り組んできた。その結果、オウム返しではなく、少しずつ自分の言葉で発音できるようになってきた児童もみられるようになった。

(3) 読む活動を多く取り入れる

- ・読むことを国語の時間に毎回取り入れてきた。自分の考えや思っていることを言葉にすることはたいへん難しいが、書かれている文字を発音することは、ほとんどの子どもたちができる。それを繰り返し読むことで、話し言葉の語彙を増やすことに取り組んだ。その結果、読むことに対してどの子も抵抗なく行えるようになってきた。

(4) 読むなかで単語や熟語の意味を丁寧に指導する

- ・実際に読んだ文の意味をかみ砕いて説明したり、動作などをくわえてどんな場面の言葉なのかをわかりやすく指導してきた。わかったかどうかの反応が得られない場合が多かったが、根気強く行うようにしてきた。

(5) コンピュータを活用する

- ・視覚的手がかりの有効な道具となるコンピュータすなわちパソコンを教室にひとり一台設置し、授業ばかりでなく、休み時間においても子どもたちが自由に活動できるようにしてきた。絵や写真や動画がふんだんに見られるパソコンは、子どもたちにとってとてもわかりやすく、パソコンとの模擬会話を十分に楽しむことができ、どの子にも十分な効果が見られた。

(6) 個別指導の工夫

- ・それぞれの子どもたちの実態を把握して、個別指導を工夫してきた。場の設定や自分で学習するスタイルは、しっかりと身につけ、おちついた学習を年間を通して行うことができた。

2. 今後の課題

- ・おなじ単元を使って、それぞれの子の能力に合わせ、一斉授業を組み立てることはできたが、その単元と個別指導での内容の関連性を今後検討していくことが必要である。
- ・読むことから、話すということに結びつけるように実践してきたが、自分の思いが言葉として自然と表現されるような共通体験を取り入れる工夫も今後の課題である。
- ・コンピュータを活用したことで、どの子にも活用能力が身につけてきたが、それを普段の実践の中に役立てる方法を今後考えていくようにする。
- ・教室ばかりでなく、構造化の工夫を学校の全体に広めることも大切な課題だともおられる。